

県庁、ここには長崎奉行所西役所があり、その前を通つて御旅所に向かつたのである。なお、江戸時代の踊町は、御供町（おともちよう）と呼ばれ、渡御、還御の行列を先導した。そこで、長崎奉行所西役所の表門前にも桟敷が設けられ、渡御、還御とも踊町はそれぞれ踊や出し物（以下、踊と略）を披露したのである。

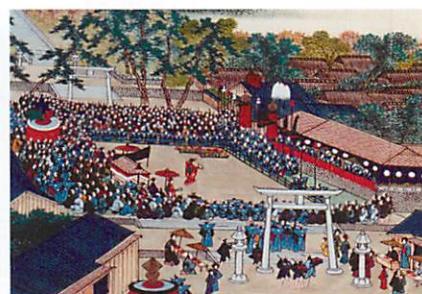
ところで、どうして渡御の行列は、現在の長崎商工会议館の所で左折したのか、どうして真っ直ぐ進まなかつたのか疑問であつた。これについて、「長崎市史・地誌部神社教会編上」には、キリシタンが瓦礫などを投げて行列を妨害したので、やむなく左折、これが恒例となつたとあるが（三八頁）、時代は寛永一一年（二六三四）である、キリシタンの妨害など考えられない。

考えられるのは、現在の長崎地方検察庁や長崎地方裁判所の場所は、江戸時代、長崎で最初の町島原町（二番町）であった。ということは、渡御の行列は最初から一番町である島原町を通ることに

なつていて、キリシタンの妨害というのは、明治時代になつて、一番町などの区別がなくなつた頃の作り話と思われる。



長崎奉行への踊の披露はここで行われた



長崎奉行に踊が披露されている

くんちが無事終わつたことを報告したのである。

第一回長崎学公開講座
第一部発表要旨

ると、くんちは旧来の姿に戻った。

澤宣嘉のくんち改革 明治新政府が樹立され、慶應四年（一八六八）二月、公家澤宣嘉が九州鎮撫総督（のちに長崎府知事）として長崎に赴任すると、長崎くんち（以下、くんちと記述）に関しても改革がなされた。

寛政五年（一七九三）から、七日は將軍家治の忌日で、前日に当たるため、神事が九日、一一日に変更されていたが、九月七日と九月二十六日と二回行われた。



（明治四年文書科事務簿御布令留
長崎歴史文化博物館収藏）

考えられるのは、現在の長崎地方検察庁や長崎地方裁判所の場所は、江戸時代、長崎で最初の町島原町（二番町）であつた。といふことは、渡御の行列は最初から一番町である島原町を通ることに

さらに二日には諏訪神社の能舞台で神事能があり、この神事能が終わると諏訪神社宮司青木若狭守は長崎奉行に神事能が終わったことを報告した。すると長崎奉行は早飛脚を仕立て江戸の老中に

ところで、どうして渡御の行列は、現在の長崎商工会館の所で左折したのか、どうして真っ直ぐ進まなかつたのか疑問であつた。これについて、「長崎市史・地誌部神社教会編上」には、キリシタンが瓦礫などを投げて行列を妨害したので、やむなく左折、これが恒例となつたとあるが（三八頁）、時代は寛永一一年（二六三四）である、キリシタンの妨害など考えられない。

鳥居の上、現在の三ノ鳥居と四ノ鳥居（江戸時代は三ノ鳥居も四ノ鳥居もなかつた）の間、それも諷訪神社ではなく、右側に設けられた長崎奉行専用の桟敷に座る長崎奉行に踊が披露されたのである。そして、踊の披露が終わると、三体の神輿が諷訪神社に到着、長崎奉行は拝殿の前で神輿を迎えた。その後、長崎奉行が再び桟敷にもどると、流鏑馬が行われた。

県庁、ここには長崎奉行所西役所があり、その前を通つて御旅所に向かつたのである。なお、江戸時代の踊町は、御供町（おともちよう）と呼ばれ、渡御、還御の行列を先導した。そこで、長崎奉行所西役所の表門前にも桟敷が設けられ、渡御、還御とも踊町はそれぞれ踊や出し物（以下、踊と略）を披露したのである。

なつていて、キリシタンの妨害というのは、明治時代になつて、一番町などの区別がなくなつた頃の作り話と思われる。

くんちが無事終わったことを報告したのである。

また華美的極みとまで
世間に謳われた諏訪神事
は、長崎の旧弊を打破し
経費の大節約を行うた
め、大鉈が振るわれた。
八月に出された布達は
御供町（踊町）の廢止、奉
納踊も全廃、傘鉾のみ許
されたが、直径四尺（一.
m）、出し（飾り）は町名を
記すだけというものであつ
た。但し、丸山町、寄合町
の両町だけは、傘鉾と小
舞の奉納が許された。
しかし、澤が長崎を去

明治四年文書科事務簿御布令留 （長崎歴史文化博物館収蔵）	議方社奉札町入賣銀圓 一萬五百兩	年一等町
	一間五百五十面	分二等町
	一間四百面	分三等町
	一間三百五十面	分四等町
右者議方社奉札町入賣銀圓	分五等町	

同年の御布令留「諫訪社祭礼町入費規制」の項目には、踊町を五等級に分け、第一等町五〇〇両、第二等町四五〇両、第三等町四〇〇両、第四等町三五〇両、第五等町三〇〇両と記載されている。残念ながら等級別の町名が確認できないが、町民の世帯数や坪数、収入により定められたのではないかと思われる。

奉納踊の中止

ところで、『榎津町高見家神事記録』は明治四年(一八七二)の次は、七年後

不明であるが、明治八年(一八七五)の「(略)而して中絶していた奉納踊は今年より極めて質素に復活された」(『長崎市史地誌編』)などの記述から、明治六年(一八七三)明治七年(一八七四)奉納踊が中止になった可能性があると推測される。

くんちに對してどのようないきと/or>うな措置がとられたか不明であるが、明治八年(一八七五)の「(略)而して中絶していた奉納踊は今年より極めて質素に復活された」(『長崎市史地誌編』)などの記述から、明治六年(一八七三)明治七年(一八七四)奉納踊が中止になった可能性があると推測される。



住吉社神輿の「還郷祭」(諫訪神社、平成30年9月)現在、長崎歴史文化博物館に収蔵

と/or>明治一三年(一八八〇)の神事記録が現存している。これにより、その間、奉納踊が中止され、踊町を延期した可能性が考えられる。

『祭芸能行事大辞典』下巻(朝倉書店)によると、「明治新政府は明治五年(一八七二)江戸時代は、通り物(豪華な仮装行列の様なもの)と本踊という組合せで奉納踊も、どちらか一方になつていく。」

〔表〕踊町奉納踊の中止(自肃・遠慮)		
明治6・7年	1873・1874	中止か?(踊町縛延)
明治21年	1888	コレラ流行
大正元年	1912	天皇崩御(踊町縛延)
大正3年	1914	皇后崩御・第一次世界大戦
大正12年	1923	関東大震災
昭和12・13・14年	1937~1939	日中戦争
昭和18・19・20年	1943~1945	第二次世界大戦

明治八年(一八七五)くんちは太陽暦の二〇月七日、九日に改正された。明治一一年(一八七八)止の目的が祭礼を通じて維持されていた地域共同体と意識を国家が直接管理しようとする政府の

神輿(四角形)が新調された。旧神輿(六角形)は柳川市の三島神社に払い下げられた。このうち現存していた住吉社の神輿が平成三十一年(二〇一八)に長崎市に寄贈され、里帰りした。

明治一八年(一八八五)は、明治二一年(一九〇〇)には、その後も明治天皇の崩御、皇太后崩御、関東大震災のため、奉納踊を遠慮や自肅している(別表)。明治大正期は中止や変則の奉納が続いた。なお、奉納踊が中止の場合はも神事は行われた。

コレラ流行と戦争が猛威を振るった。明治一〇年(一八七七)西南戦争とコレラの蔓延により、明治二〇年(一九〇〇)が行われた。十二月七日神幸、一一日が還幸が行われた。

元亀二年(一五七一)三月、長崎開港に先立ち町建が開始された。町建は、島原町に始まり大村町、平戸町、外浦町、横瀬浦町、分知町の六か町が造成された。この地について、一五七九年のカリアン神父の報告書には「草原」とあるが、『長崎割記』には「麦畠」とあることから、もともと集落などはなかつたようである。

また、巡察使ヴァアリニヤーは、この六か町が海に囲まれた岬の、それも高い崖の上に築かれ、まるで要塞のようであると述べている。開港当時、大波戸はまだなく、船津(現在の瓊の浦公園一帯)が唯一の港で、ポルトガル船もここに貿易品を陸揚げしていた。

ということは、船津からの距離からしても、六万才町より桜町の方が何かと好都

変化を遂げていく。

第一回長崎学公開講座
第二部発表要旨

コレラ流行と戦争

六か町の誕生

原田 博二

明治期の長崎は、コロナが猛威を振るった。明治一〇年(一九〇〇)が猛威を振るった。明治二〇年(一九〇〇)が行われた。十二月七日神幸、一一日が還幸が行われた。

元亀二年(一五七一)三月、長崎開港に先立ち町建が開始された。町建は、島原町に始まり大村町、平戸町、外浦町、横瀬浦町、分知町の六か町が造成された。

この地について、一五七九年のカリアン神父の報告書には「草原」とあるが、『長崎割記』には「麦畠」とあることから、もともと集落などはなかつたようである。

また、巡察使ヴァアリニヤーは、この六か町が海に囲まれた岬の、それも高い崖の上に築かれ、まるで要塞のようであると述べている。開港当時、大波戸はまだなく、船津(現在の瓊の浦公園一帯)が唯一の港で、ポルトガル船もここに貿易品を陸揚げしていた。

ということは、船津からの距離からしても、六万才町より桜町の方が何かと好都

合ではないかと思われるが、敵の攻撃を防ぐためには、高い崖と海に囲まれた現在の万才町の方がよかつたのである。

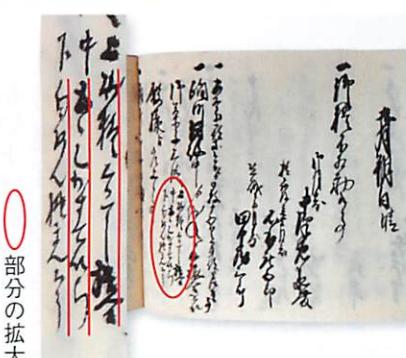


岬の先端部分に六か町（○印）は造成された
〔寛永長崎港図〕（部分・長崎歴史文化博物館収蔵）

六か町は、寛永一年（一六三四年）横瀬浦町が平戸町に、同一年（一六三四年）四二分知町が外浦町にそれぞれ編入され、六か町は四か町となつた。明治五年（一八七二年）に明治天皇が長崎に行幸された際、島原町の高木家の屋敷が行在所（あんざいしょ）とされたことから、同町は万歳町と改称された。さらに昭和三九年（一九六四年）の町界町名の変更で、万歳町は、他の大村町、平戸町、外浦町とともに万才町となり、現在に至っている。

この内覧について、文政二〇年（一八二七年）の『乍恐以封書奉願口上書』（長崎歴史文化博物館収蔵）と題する歎願書には、長崎奉行の内覧は、最初は八百屋町が九月二日の人數揃の時に長崎奉行に見せていたが、後には各踊うになつたとある。さらにこの内覧は、二日続けて人數揃を行うようなもので、手間も費用も余計に掛かるので、以

長崎奉行に御菓子が献上された
〔天保四年「日記」〕（部分・長崎歴史文化博物館収蔵）



高野屋は、現在の熊本県八代市から長崎に移住、その子勇助（同家初代）の時にカラスミの製造を始めた。勇助は、野母崎の鱈（ほら）の卵に着目、以後に精製に精製を重ね、ついに同家秘伝（二子相伝）のカラスミの製法を大成しました。正徳二年（一七二二年）に

直次郎は、長崎でも名所旧跡の数々を詠つていますが、個人については極めて稀で、それだけにこの書は、大変なお宝なのです。このように高野屋のカラスミは、天下の珍味と讚えられたもの、皆様にはこれからも心のこもった伝統の味をご賞味いただけます。

第二回長崎学公開講座 第二部発表要旨

長崎奉行の踊の内覧

原田 博二

後廃止して欲しいという
ものであつた。この歎願書が効を奏し、翌一年（一八二八年）には内覧は廃止された。

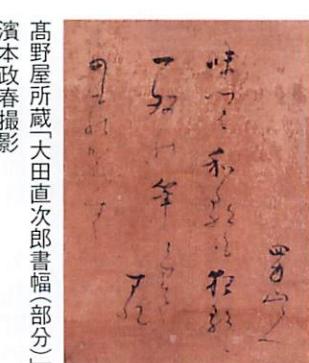
法人会員紹介 からすみ元祖高野屋

長崎市築町一番六号
からすみ元祖高野屋



からすみ元祖高野屋

崎奉行駒木根肥後守らの推奨により将軍家に献上、その献上は慶応三年（一八六七年）まで七代にわたって継続されました。文化元年（一八〇四年）長崎奉行所支配勘定として長崎に赴任した、蜀山人や南畠、さらには四方（よも）山人の名で有名な大田直次郎も「味（わ）いは和歌も狂歌も一隻の筆とりてそれのも（野母）のからすみ」とその味を絶賛しています。



高野屋所蔵〔大田直次郎書幅（部分）〕
濱本政春撮影